



半七捕物帳 01

ふみ

# お 文 の 魂

岡本綺堂



青空文庫



青空  
文庫

わたしの叔父は江戸の末期に生まれたので、その時代に最も多く行なわれた化け物屋敷の不入の間や、嫉み深い女の生霊や、執念深い男の死霊や、そうしたたぐいの陰惨な幽怪な伝説をたくさんに知っていた。しかも叔父は「武士たるものが妖怪などを信ずべきものでない」という武士的教育の感化から、一切これを否認しようとなめていたらしい。その気風は明治以後になつても失せなかつた。わたし達が子供のときに何か取り留めのない化け物話などを始めると、叔父はいつでも苦い顔をして碌々相手にもなつてくれなかつた。

その叔父がただ一度こんなことを云つた。

「しかし世の中には解らないことがある。あのおふみの一件などは……」

おふみの一件が何であるかは誰も知らなかつた。叔父も自己の主張を裏切るような、この不可解の事実を発表するのが如何にも残念であつたらしく、その以上には何も秘密を洩らさなかつた。父に訊いても話してくれなかつた。併しその事件の陰にはKのおじさんが潜んでいるらしいことは、叔父の口ぶりに困つてほぼ想像されたので、わたしの稚い好奇心はどうとう私を促してKのおじさんのところへ奔らせた。わたしはその時まで十二であつた。Kのおじさんは、肉縁の叔父ではない。父が明治以前から交際しているので、わたしは稚い時か

らこの人をおじさんと呼び慣わしていたのである。

わたしの質問に対して、Kのおじさんも満足な返答をあたえてくれなかった。

「まあ、そんなことはどうでもいい。つまらない化け物の話なんぞすると、お父さんや叔父さんに叱られる」

ふだんから話し好きのおじさんも、この問題については堅く口を結んでいるので、わたしも押し返して詮索する手がかりが無かった。学校で毎日のように物理学や数学をどしどし詰め込まれるのに忙がしい私の頭からは、おふみという女の名も次第に煙りのように消えてしまった。それから二年ほど経って、なんでも十一月の末であったと記憶している。わたしが学校から帰る頃から寒い雨がそぼそぼと降り出して、日が暮れる頃には可なり強い降りになった。Kのおじさんは近所の人に誘われて、きょうは午前ひるまえから新富座見物に出かけた筈はずである。

「わたしは留守番だから、あしたの晩は遊びにおいでよ」と前の日にKのおじさんが云った。わたしはその約束を守って、夕飯を済ますとすぐにKのおじさんをたずねた。Kの家はわたしの家から直径にして四町ほどしか距はなれていなかったが、場所は番町で、その頃には江戸時代の形見という武家屋敷の古い建物がまだ取払われずに残っていて、晴れた日にも何だか陰かげったような薄暗い町の影を作っていた。雨のゆうぐれは殊にわびしかった。Kのおじさんも或ある大名屋敷の門内に住んでいたが、おそらくその昔は家老とか用人とかいう身分の人の

住居であつたらう。ともかくも一軒建てになつていて、小さい庭には粗い竹垣が結いまわしてあつた。

Kのおじさんは役所から帰つて、もう夕飯をしまつて、湯から帰つていた。おじさんは私を相手にして、ランプの前で一時間ほども他愛もない話などをしていた。時々雨戸をなでる庭の八つ手の大きい葉に、雨音がぴしゃぴしゃときこえるのも、外の暗さを想わせるような夜であつた。柱にかけてある時計が七時を打つと、おじさんはふと話をやめて外の雨に耳を傾けた。

「だいぶ降つて来たな」

「おばさんは帰りに困るでしょう」

「なに、人力車を迎いにやつたからいい」

こう云つておじさんは又黙つて茶を喫んでいたが、やがて少しまじめになつた。

「おい、いつかお前が訊いたおふみの話を今夜聞かしてやろうか。化け物の話はこういう晩がいいもんだ。しかしお前は臆病だからなあ」

実際わたしは臆病であつた。それでも怖い物見たさ聞きたさに、いつも小さいからだを固くして一生懸命に怪談を聞くのが好きであつた。殊に年来の疑問になつておふみの一件を測らずもおじさんの方から切り出したので、わたしは思わず眼をかがやかした。明るいらんぷの下ならどんな怪談でも怖くないというふうに、わざと肩をそびやかしておじさんの顔

をきつとみあげると、しいて勇氣をよそおうような私の子供らしい態度が、おじさんの眼にはおかしく見えたらしい。彼はしばらく黙つてにやにや笑つていた。

「そんなら話して聞かせるが、怖くつて家へ歸られなくなつたから、今夜は泊めてくれなんて云うなよ」

まづこう嚇おどして置いて、おじさんはおふみの一件というのをしずかに話し出した。

「わたしが丁度二十歳の時だから、元治元年——京都では蛤御門のいくさがあつた年のことだと思え」と、おじさんは先ず冒頭まくらを置いた。

その頃この番町に松村彦太郎という三百石の旗本が屋敷を持つていた。松村は相当に学問もあり、殊に蘭学が出来たので、外国掛がいこくがかりの方へ出仕しゅつしして、ちよつと羽振りの好い方であつた。その妹のお道というのは、四年前に小石川西江戸川端の小幡伊織おぼたという旗本の屋敷へ縁付いて、お春という今年三つの娘までもうけた。

すると、ある日のことであつた。そのお道がお春を連れて兄のところへ訪ねて来て、「もう小幡の屋敷にはいられませんから、暇を貰もらつて頂きとうございます」と、突然に飛んだことを云い出して、兄の松村をおどろかした。兄はその仔細しさいを聞きただしたが、お道は蒼あおい顔をしてゐるばかりで何も云わなかつた。

「云わないで済むわけのものでない。その仔細をはつきりと云え。女が一旦他家へ嫁入りをした以上は、むやみに離縁なぞすべきものでも無し、されるべき筈のものでもない。唯ただだし

ぬげに暇を取ってくれでは判らない。その仔細をよく聞いた上で、兄にも成程と得心がま  
いったら、また掛け合いのしようもあろう。仔細を云え」

この場合、松村でなくても、まずこう云うよりほかはなかったが、お道は強情に仔細を明  
かさなかつた。もう一日もあの屋敷にはいられないから暇を貰ってくれと、ことし二十一に  
なる武家の女房が、まるで駄々っ子のように、ただ同じことばかり繰り返しているの、堪  
忍強い兄もしまいに焦れ出した。

「馬鹿、考えてもみる、仔細も云わずに暇を貰いに行けると思うか。また、先方でも承知する  
と思うか。きのうや今日嫁に行つたのでは無し、もう足掛け四年にもなり、お春という子ま  
でもある。舅小姑の面倒があるでは無し、主人の小幡は正直で物柔らかな人物。小身ながら  
も無事に上の御用も勤めている。なにが不足で暇を取りたいのか」

叱つても論しても手応えがないので、松村も考えた。よもやとは思うものの世間にためし  
が無いでもない。小幡の屋敷には若い侍がいる。近所となりの屋敷にも次三男の道楽者がい  
くらかも遊んでいる。妹も若い身空であるから、もしや何かの心得違いでも仕出来して、自分  
から身をひかなければならないような破滅に陥つたのではあるまいか。こう思うと、兄の詮  
議はいよいよ嚴重になつた。どうしてもお前が仔細を明かさなければ、おれの方にも考えが  
ある。これから小幡の屋敷へお前を連れて行って、主人の眼の前で何もかも云わしてみせる。  
さあ一緒に来いと、襟髪を取らぬばかりにして妹を引立てようとした。

兄の権幕けんまくがあまり激しいので、お道もさすがに途方に暮れたらしく、そんなら申しますと泣いてあやまつた。それから彼女が泣きながら訴えるのを聞くと、松村はまた驚かされた。

事件は今から七日前、娘のお春が三つの節句の雛ひなを片付けた晩のことであつた。お道の枕もとに散らし髪かみの若い女が真つ蒼な顔を出した。女は水でも浴びたように、頭から着物までびしょ濡ぬれになつていた。その物腰は武家の奉公でもしたものらしく、行儀よく畳に手をついてお辞儀していた。女はなんにも云わなかつた。また別に人をおびやかすような挙動も見せなかつた。ただ黙つておとなしく其処そこにうづくまつているだけのことであつたが、それが警たどえようもないほどに物凄ものすじかつた。お道はぞつとして思おもわず衾よぎの袖そでにしがみ付くと、おそろしい夢は醒さめた。

これと同時に、自分と添い寝をしていたお春もおなじく怖い夢にでもおそわれたらしく、急に火の付くように泣き出して、「ふみが来た。ふみが来た」と、つづけて叫んだ。濡れた女は幼い娘の夢をも驚かしたらしい。お春が夢中で叫んだふみというのは、おそらく彼女の名であらうと想像された。

お道はおびえた心持で一夜を明かした。武家に育つて武家に縁付いた彼女は、夢のような幽霊ばなしを人に語るのを恥じて、その夜の出来ごとは夫にも秘していたが、濡れた女は次の夜にも、又その次の夜にも彼女の枕もとに真つ蒼な顔を出した。そのたびごとに幼いお春も「ふみが来た」と同じく叫んだ。気の弱いお道はもう我慢が出来なくなつたが、それでも夫



に打ちあける勇氣はなかつた。

こういうことが四晩もつづいたので、お道も不安と不眠とに疲れ果ててしまった。恥も遠慮も考えてはいられなくなつたので、とうとう思い切つて夫に訴えると、小幡は笑つていりばかりで取り合ひなかつた。しかし濡れた女はその後もお道の枕辺まくらべを去らなかつた。お道がなんと云つても、夫は受け付けてくれなかつた。しまいには「武士の妻にもあるまじき」というような意味で、機嫌を悪くした。

「いくら武士でも、自分の妻が苦しんでいるのを、笑つて観みている法はあるまい」

お道は夫の冷淡な態度を恨むようになって来た。こうした苦しみがいつまでも続いたら、自分は遅かれ速かれ得えたい体の知れない幽霊のために責め殺されてしまうかも知れない。もうこゝなつたら娘をかかえて一刻いっときも早くこんな化け物屋敷を逃げ出すよりほかあるまいと、お道はもう夫のことも自分のことも振り返つてゐる余裕がなくなつた。

「そういう訳わけでございますから、あの屋敷にはどうしてもいられません。お察し下さい」

思い出してもぞつとすると云うように、お道はこの話をする間にも時々息を嚔のんで身をおのかせていた。そのおどおどしている眼の色がいかに偽りを包んでいるようには見えないので、兄は考えさせられた。

「そんな事がまつたくあるかしらん」

どう考えても、そんなことが有りそうにも思われなかつた。小幡が取り合ひないのも無理

はないと思つた。松村も「馬鹿をいえ」と、頭から叱りつけてしまおうかとも思つたが、妹がこれほどに思い詰めているものを、唯いちがいに叱つて追いやるのも何だか可哀そうのようでもあつた。殊に妹はこんなことを云うものの、この事件の底にはまだほかに何かこみいつた事情がひそんでいないとも限らない。いづれにしても小幡に一度逢つた上で、よくその事情を確かめてみようと思つた。

「お前の片口かたくちばかりでは判らん。ともかくも小幡に逢つて、先方の料簡りょうけんを訊いてみよう、万事おれに任しておけ」

妹を自分の屋敷に残して置いて、松村は草履取り一人を連れて、すぐ西江戸川端に出向いた。

小幡の屋敷へゆく途中でも松村はいろいろに考えた。妹はいわゆる女子供のたぐいで、もとより論にも及ばぬが、自分は男一匹、しかも大小をたばさむ身の上である。武士と武士との掛け合いに、真顔になって幽霊の講釈でもあるまい。松村彦太郎、好い年をして馬鹿な奴だと、相手に腹を見られるのも残念である。なんとか巧い掛け合いの法はあるまいかと工夫を凝らしたが、問題があまり単純であるだけに、横からも縦からも話の持つて行きようがなかった。

西江戸川端の屋敷には主人の小幡伊織が居合わせて、すぐに座敷に通された。時候の挨拶などを終つても、松村は自分の用向きを云い出す機会をとらえるのに苦しんだ。どうで笑われると覚悟をして来たものの、さて相手の顔を見ると、どうも幽霊の話は云い出しにくかった。そのうちに小幡の方から口を切った。

「お道はきょう御屋敷へ伺いませんでしたか」

「まいりました」とは云ったが、松村はやはり後の句が継げなかった。

「では、お話し申したか知らんが、女子供は馬鹿なもので、なにかこのごろ幽霊が出るとか申して、はははははは」

小幡は笑っていた。松村も仕方がないので一緒に笑った。しかし、笑つてばかりいては濟まない場合であるので、彼はこれを機しほに思い切つておふみの一件を話した。話してしまつてから彼は汗を拭ふいた。こうなると、小幡も笑えなくなつた。かれは困つたような顔をしかめて、しばらく黙つていた。単に幽霊が出るといふだけの話ならば、馬鹿とも臆病とも叱つても笑つても濟むが、問題がこう面倒になつて兄が離縁の掛け合いめいた使に来るようでは、小幡もまじめになつてこの幽霊問題を取り扱わなければならないことになつた。

「なにしろ一応詮議して見ましよう」と小幡は云つた。彼の意見としては、もしこの屋敷に幽霊が出る——俗にいう化け物屋敷であるならば、こんにちまでに誰かその不思議に出逢つたものが他にあるべき筈である。現に自分はこの屋敷に生まれて二十八年の月日を送つているが、自分は勿論もちろんのこと、誰からもそんな噂うわさすら聞いたことがない。自分が幼少のときに別れた祖父母も、八年前に死んだ父も、六年前に死んだ母も、かつてそんな話をしたこともなかつた。それが四年前に他家から縁付いて来たお道だけに見えるというのが、第一の不思議である。たとい何かの仔細があつて、特にお道にだけ見えるとしても、ここへ来てから四年の後に初めて姿をあらわすというのも不思議である。しかしこの場合、ほかに詮議のしようもないから、差し当つては先ず屋敷じゅうの者どもを集めて問いただしてみようというのであつた。

「なにぶんお願い申す」と、松村も同意した。小幡は先ず用人ようじんの五左衛門を呼び出して調べた。

かれは今年四十一歳で譜代の家来であつた。

「先殿様の御代から、かつて左様な噂を承つたことはござりませぬ。父からも何の話も聞き及びませぬ」

彼は即座に云い切つた。それから若党や中間どもを調べたが、かれらは新参の渡り者で、勿論なんにも知らなかつた。次に女中共も調べられたが、かれらは初めてそんな話を聞かされて唯ふるえ上がるばかりであつた。詮議はすべて不得要領に終つた。

「そんなら池を浚つてみる」と、小幡は命令した。お道の枕辺にあらわれる女が濡れているというのを手がかりに、或いは池の底に何かの秘密が沈んでいるのではないかと考えられたからであつた。小幡の屋敷には百坪ほどの古池があつた。

あくる日は大勢の人足をあつめて、その古池の搔掘をはじめた。小幡も松村も立ち会つて監視していたが、鮒や鯉のほかには何の獲物もなかつた。泥の底からは女の髪一と筋も見付からなかつた。女の執念の残つていそうな櫛やかんざしのたぐいも拾い出されなかつた。小幡の発議で更に屋敷内の井戸をさらわせたが、深い井戸の底からは赤い泥鰯が一匹浮び出て大勢を珍らしがらせただけで、これも骨折り損に終つた。

詮議の蔓はもう切れた。

今度は松村の発議で、忌がるお道を無理にこの屋敷へ呼び戻して、お春と一緒にいつもの部屋に寝かすことにした。松村と小幡とは次の間に隠れて夜の更けるのを待つていた。

その晩は月の陰くもった暖かい夜であつた。神経の興奮ふすまし切つているお道は、とても安らかに眠られそうもなかつたが、なんにも知らない幼い娘はやがてすやすやと寝ついたかと思うと、忽たちまち針で眼球めだまでも突かれたようにけたたましい悲鳴をあげた。そうして「ふみが来た、ふみが来た」と、低い声で唸うなつた。

「そら、来た」

待ち構えていた二人の侍は押っ取り刀でやにわに襖ふすまをあけた。閉め込んだ部屋のなかには春の夜のなまあたたかい空氣が重く沈んで、陰つたような行燈あんどんの灯はまたたきもせずにお母おやこ子の枕もとを見つめていた。外からは風さえ流れ込んだ氣配が見えなかつた。お道はわが子を犇ひしと抱きしめて、枕に顔を押しつけていた。

現在にこの生きた証拠ちんにゆうしやを見せつけられて、松村も小幡も顔を見合させた。それにしても自分たちの眼にも見えない闖入者ちんにゆうしやの名を、幼いお春がどうして知っているのであろう。それが第一の疑問であつた。小幡はお春をすかしていろいろに問いたしたが、年弱としよわの三つでは碌々ろくろくに口もまわらないので、ちつとも要領を得なかつた。濡れた女はお春の小さい魂に乗りうつつて、自分の隠れた名を人に告げるのではないかとも思われた。刀を持っていた二人もなんだか薄氣味悪くなつて来た。

用人の五左衛門も心配して、あくる日は市ヶ谷で有名な売卜者うらないしやをたずねた。売卜者は屋敷の西にある大きい椿の根を掘つてみると教えた。とりあえずその椿を掘り倒してみたが、そ

の結果はいたずらに売卜者の信用をおとすに過ぎなかった。

夜はとても眠れないというので、お道は昼間寢床にはいることにした。おふみもさすがに昼は襲つて来なかつた。これで少しはほつとしたものの、武家の妻が遊女かなんぞのように、夜は起きていて昼は寝る、こうした変則の生活状態をつづけてゆくのは甚だ迷惑でもあり、且かつは不便でもあつた。なんとかして永久にこの幽霊を追いはらつてしまふのでなければ、小幡一家の平和を保つことは覚束おぼつかないように思われた。併しこんなことが世間に洩れては家の外間にもかかわるといふので、松村も勿論秘密を守つていた。小幡も家来どもの口を封じて置いた。それでも誰かの口から洩れたとみえて、けしからぬ噂がこの屋敷に出入りする人々の耳にささやかれた。

「小幡の屋敷に幽霊が出る。女の幽霊が出るそうだ」

蔭では尾鱈おしれをつけていろいろの噂をするものの、武士と武士との交際では、さすがに面と向つて幽霊の詮議せんぎをする者もなかつたが、その中に唯一人、すこぶる無遠慮な男があつた。それが即ち小幡の屋敷の近所に住んでいるKのおじさんで、おじさんは旗本の次男であつた。その噂を聴くと、すぐに小幡の屋敷に押し掛けて行って、事の実否じつぴを確かめた。

おじさんとは平生へいぜいから特に懇意こんいにしているので、小幡も隠さず秘密を洩らした。そうして、なんとかしてこの幽霊の真相を探りきわめる工夫はあるまいかと相談した。旗本に限らず、御家人に限らず、江戸の侍の次三男などというものは、概して無役むやくの閑人ひまじんであつた。長男は

無論その家を嗣ぐべく生まれたのであるが、次男三男に生まれたものは、自分に特殊の才能があつて新規御召出しの特典をうけるか、あるいは他家の養子にゆくか、この二つの場合を除いては、殆ど世に出る見込みもないのであつた。かれらの多くは兄の屋敷に厄介になつて、大小を横たえた一人前の男がなんの仕事もなしに日を暮らしているという、一面から見れば頗る呑気らしい、また一面から見れば、頗る悲惨な境遇に置かれていた。

こういう余儀ない事情はかれらを駆つて放縱懶惰の高等遊民たらしめるよりほかはなかつた。かれらの多くは道楽者であつた。退屈しのぎに何か事あれかしと待ち構えている徒であつた。Kのおじさんも不運に生まれた一人で、こんな相談相手に選ばれるには屈竟の間であつた。おじさんは無論喜んで引き受けた。

そこで、おじさんは考えた。昔話の綱や金時のように、頼光の枕もとに物々しく宿直を仕るのもう時代おくれである。まず第一にそのおふみという女の素性を洗つて、その女とこの屋敷との間にどんな糸が繋がつているかということを探り出さなければいけないと思ひ付いた。

「御当家の縁者、又は召使などの中に、おふみという女の心当りはござるまいか」

この問いに対して、小幡は一向に心当たりがないと答えた。縁者には無論ない。召使はたびたび出代りをしているから一々に記憶していかないが、近い頃にそんな名前の女を抱えたこととはないと云つた。更にだんだん調べてみると、小幡の屋敷では昔から二人の女を使つてい



る。その一人は知行所の村から奉公に出て来るのが例で、ほかの一人は江戸の請宿うけやどから随意に雇っていることが判った。請宿は音羽おとわの堺屋というのが代々の出入りであった。

お道の話から考えると、幽霊はどうしても武家奉公の女らしく思われるので、Kのおじさんは遠い知行所を後廻しにして、まず手近かの堺屋から詮索に取りかかろうと決心した。小幡が知らない遠い先代の頃に、おふみという女が奉公していたことが無いとも限らないと思つたからであつた。

「では、何分よろしく、しかしくれぐれも隠密にな」と、小幡は云つた。

「承知しました」

二人は約束して別れた。それは三月の末の晴れた日で、小幡の屋敷の八重桜にも青い葉がもう目立っていた。

## 三

Kのおじさんは音羽の堺屋へ出向いて、女の奉公人の出入り帳を調べた。代々の出入り先であるから、堺屋から小幡の屋敷へ入れた奉公人の名前はことごとく帳面にしるされている筈であった。

小幡の云つた通り、最近の帳面にはおふみという名を見出すことは出来なかつた。三年、五年、十年とだんだんにさかのぼつて調べたが、おふゆ、おふく、おふさ、すべてふの字の付く女の名は一つも見えなかつた。

「それでは知行所の方から来た女かな」

そうは思いながらも、おじさんはまだ強情じやうじやうに古い帳面を片つ端から繰つてみた。堺屋は今から三十年前の火事に古い帳面を焼いてしまつて、その以前の分は一冊も残つていない。店にあらん限りの古い帳面を調べても、三十年前が行き止まりであつた。おじさんは行き止まりに突き当たるまで調べ尽そうという意気込みで、煤すすけた紙に残つている薄墨の筆のあとを根好こんくたどつて行つた。

帳面はもちろん小幡家のために特に作つてあるわけではない。堺屋出入りの諸屋敷の分は一切あつめて横綴じの厚い一冊に書き止めてあるのであるから、小幡という名を一々拾い出

して行くだけでも、その面倒は容易でなかった。殊に長い年代にわたっているのであるから、筆跡も同一ではない。折れ釘のような男文字のなかに糸屑のような女文字もまじっている。殆ど仮名ばかりで小児が書いたようなところもある。その折れ釘や糸屑の混雑を丁寧に見わけてゆくうちには、こつちの頭も眼もくらみそうになって来た。

おじさんもそろそろ飽きて来た。面白ずくで飛んだ事を引受けたという後悔の念も兆きざして来た。

「これは江戸川の若旦那。なにをお調べになるんでございます」

笑いながら店先へ腰を掛けたのは四十二三の痩やせぎすの男で、縞の着物に縞の羽織を着て、だれの眼にも生地きじの堅気かたぎとみえる町人風であった。色のあさ黒い、鼻の高い、芸人か何ぞのようように表情に富んだ眼をもっているのが、彼の細長い顔の著しい特徴であった。かれは神田の半七という岡つ引で、その妹は神田の明神下で常磐津の師匠をしている。Kのおじさんは時々その師匠のところへ遊びにゆくので、兄の半七とも自然懇意になった。

半七は岡つ引の仲間でも幅利きであった。しかし、こんな稼業の者にはめずらしい正直な淡泊あつさりした江戸っ子風の男で、御用をかさに着て弱い者をいじめるなどという悪い噂は、かつて聞えたことがなかった。彼は誰に対しても親切な男であった。

「相変らず忙がしいかね」と、おじさんは訊いた。

「へえ。きょうも御用でここへちよつとまいりました」

それから二つ三つ世間話をしている間に、おじさんは不図かんがえた。この半七ならば秘密を明かしても差支えはあるまい、いつそ何もかも打明けて彼の知恵を借りることにしようかと思つた。

「御用で忙がしいところを気の毒だが、少しお前に聞いて貰いたいことがあるんだが……。」と、おじさんは左右を見まわすと、半七は快くうなずいた。

「なんだか存じませんが、ともかくも伺いましょう。おい、おかみさん。二階をちよいと借りるぜ。好いかい」

彼は先に立つて狭い二階にあがつた。二階は六畳ひと間で、うす暗い隅には葛籠などが置いてあつた。おじさんも後からつづいてあがつて、小幡の屋敷の奇怪な出来事について詳しく話した。

「どうだろう。うまくその幽霊の正体を突き止める工夫はあるまいか。幽霊の身許が判つて、その法事供養でもしてやれば、それでよかろうと思うんだが……。」

「まあ、そうですねえ」と、半七は首をかしげてしばらく考えていた。「ねえ、旦那。幽霊は、ほんとうに出るんでしょうか」

「さあ」と、おじさんも返事に困つた。「まあ、出ると云うんだが……。私も見たわけじゃない」

半七はまた黙つて煙草をすつていた。

「その幽霊というのは武家の召使らしい風をして、水だらけになつてゐるんですね。早く云えば皿屋敷のお菊をどうかしたような形なんですネ」

「まあ、そうらしい」

「あの御屋敷では草双紙のようなものを御覧になりますか」と、半七はだしぬけに、思いも付かないことを訊いた。

「主人は嫌いだが、奥では読むらしい。じきこの近所の田島屋という貸本屋が出入りのようだ」

「あのお屋敷のお寺は……」

「下谷の浄円寺だ」

「浄円寺。へえ、そうですね」と、半七はにつこり笑つた。

「なにか心当りがあるかね」

「小幡の奥様はお美しいんですか」

「まあ、いい女の方だろう。年は二十一だ」

「そこで旦那。いかがでしょう」と、半七は笑いながら云つた。「お屋敷方の内輪うちわのことに、わたくしどもが首を突っ込んで悪うございますが、いつそこれはわたくしにお任せ下さいませんか。二、三日の内うちにきつと埒らちをあけてお目かけます。勿論、これはあなたとわたくしだけのことで、決して他言は致しませんから」

Kのおじさんは半七を信用して万事を頼むと云った。半七も受け合った。しかし自分は飽くまでも蔭の人として働くので、表面はあなたが探索の役目を引き受けているのであるから、その結果を小幡の屋敷へ報告する都合上、御迷惑でも明日あしたからあなたも一緒に歩いてくれとのことであつた。どうで閑ひまの多い身体からだであるから、おじさんもじきに承知した。商売人の中でも、腕利きといわれている半七がこの事件をどんなふうに扱うかと、おじさんは多大の興味を持って明日を待つことにした。その日は半七に別れて、おじさんは深川の某所に開かれる発句の運座うんざに行った。

その晩は遅く帰つたので、おじさんは明くる朝早く起きるのが辛かった。それでも約束の時刻に約束の場所で半七に逢つた。

「きようは先ず何処へ行くんだね」

「貸本屋から先へ始めましょう」

二人は音羽の田島屋へ行つた。おじさんの屋敷へも出入りするるので、貸本屋の番頭はおじさんを能く知つていた。半七は番頭に逢つて、正月以来かの小幡の屋敷へどんな本を貸し入れたかと訊いた。これは帳面に一々しるしてないので、番頭も早速の返事に困つたらしかつたが、それでも記憶のなかから繰り出して二、三種の読本よみほんや草双紙の名をならべた。

「そのほかに薄墨草紙という草双紙を貸したことはなかつたかね」と、半七は訊いた。

「ありました。たしか二月頃にお貸し申したように覚えています」

「ちよいと見せてくれないか」

番頭は棚を探して二冊つづきの草双紙を持ち出して来た。半七は手に取ってその下の巻をあけて見ていたが、やがて七、八丁あたりのところを繰り抜けてそつとおじさんに見せた。

その挿絵は武家の奥方らしい女が座敷に坐っていると、その縁先に腰元風の若い女がしよんぼりと俯向うつむいているのであった。腰元はまさしく幽霊であった。庭先には杜若かきつばたの咲いている池があつて、腰元の幽霊はその池の底から浮き出したらしく、髪も着物もむごたらしく湿ぬれていた。幽霊の顔や形は女こどもをおびえさせるほどに物凄く描いてあつた。

おじさんはぎよつとした。その幽霊の物凄いのに驚くよりも、それが自分の頭のなかに描いているおふみの幽霊にそっくりであるのにおびやかされた。その草双紙を受取つてみると、外題げだいは新編うす墨草紙、為永瓢長作と記してあつた。

「あなた、借りていらつしやい。面白い作ですぜ」と、半七は例の眼で意味ありげに知らせた。おじさんは二冊の草双紙をふところに入れて、ここを出た。

「わたくしもその草双紙を読んだことがあります。きのうあなたに幽霊のお話をうかがった時に、ふいとそれを思い出したんですよ」と、往来へ出てから半七が云つた。

「して見ると、この草双紙の絵を見て、怖い怖いと思つたもんだから、とうとうそれを夢に見るようになったのかも知れない」

「いいえ、まだそればかりじゃありませんまい。まあ、これから下谷に行つて御覧なさい」

半七は先に立つて歩いた。二人は安藤坂をのぼって、本郷から下谷の池の端へ出た。きょうは朝からちつとも風のない日で、暮春の空は碧い玉を磨いたように晴れかがやいていた。火の見櫓の上には鳶が眠ったように止まっていた。少し汗ばんでいる馬を急がせてゆく、遠乗りらしい若侍の陣笠のひさしにも、もう夏らしい光りがきらきらと光っていた。

小幡が菩提所の浄円寺は、かなり大きい寺であった。門をはいると、山吹が一ぱいに咲いているのが目についた。ふたりは住職に逢った。

住職は四十前後で、色の白い、髯のあとの青い人であった。客の一人は侍、一人は御用聞きというので、住職も疎略に扱わなかった。

ここへ来る途中で、二人は十分に打合わせをしてあるので、おじさんは先ず口を切つて、小幡の屋敷にはこの頃怪しいことがあると云った。奥さんの枕もとに女の幽霊が出ると話した。そうして、その幽霊を退散させるために何か加持祈祷のすべはあるまいかと相談した。

住職は黙つて聴いていた。

「して、それは殿さま奥さまのお頼みでござりまするか。又あなた方の御相談でござりまするか」

と、住職は数珠を爪繰りながら不安らしく訊いた。

「それはいずれでもよろしい。とにかくご承知下さるか、どうでしょう」

おじさんと半七とは鋭い瞳のひかりを住職に投げ付けると、彼は蒼くなつて少しくふるえ



た。

「修行の浅い我々でござれば、果たして奇特きどくの有る無しはお受け合い申されぬが、ともかくも一心を凝らして得脱とくだつの祈祷をつかまつると致しましょう」

「なにぶんお願い申す」

やがて時分どきだというので、念の入った精進料理が出た。酒も出た。住職は一杯も飲まなかったが、二人は鱈腹たらふくに飲んで食った。帰る時には住職は、「御駕籠でも申し付けるのでござるが……」と云つて、紙につつんだものを半七にそつと渡したが、彼は突き戻して出て来た。

「旦那、もうこれで宜しゅうございましょう。和尚め、ふるえていたようですから」と、半七は笑つていた。住職の顔色の変つたのも、自分たちに鄭重ていじゆうな馳走をしたのも、無言のうちに彼の降伏を十分に証明していた。それでもおじさんは、まだよく腑ふに落ちないことがあった。「それにしても小さい児がどうして、ふみが来たなんて云うんだろう。判らないね」

「それはわたくしにも判りませんよ」と、半七はやはり笑つていた。「子供が自然にそんなことを云う氣遣いはないから、いずれ誰かが教えたんでしようよ。唯、念のために申して置きますが、あの坊主は悪い奴で……延命院の二の舞で、これまでも悪い噂が度々あつたんですよ。それですから、あなたとわたくしとが押掛けて行けば、こつちで何も云わなくつても、先方は脛すねに疵きずでふるえあがるんです。こうして釘をさして置けば、もう詰まらないことはし

ないでしょう。わたくしのお役はこれで済みました。これから先はあなたのお考え次第で、小幡の殿様へは宜しきようにお話しなすつて下さいまし。では、これで御免を蒙こうむります」  
二人は池の端で別れた。

## 四

おじさんは帰途かえりに本郷の友達の家へ寄ると、友達は自分の識しっている踊りの師匠の大濠おおざらいが柳橋の或るところに開かれて、これから義理に顔出しをしなければならぬから、貴公も一緒に付き合えと云った。おじさんも幾らかの目録を持って一緒に行った。綺麗な娘子供の大勢あつまっている中で、燈火あかりのつく頃までわいわい騒いで、おじさんは好い心持に酔って帰った。そんな訳で、その日は小幡の屋敷へ探索の結果を報告にゆくことが出来なかった。

あくる日小幡をたずねて、主人の伊織に逢った。半七のことはなんにも云わずに、おじさんは自分ひとりで調べて来たような顔をして、草双紙と坊主との一条を自慢らしく報告した。それを聴いて、小幡の顔色は見る見る陰った。

お道はすぐに夫の前に呼び出された。新編うす墨草紙を眼の前に突き付けられて、おまえの夢に見る幽霊の正体はこれかと嚴重に吟味された。お道は色を失って一言もなかった。

「聞けば浄円寺の住職は破戒の堕落僧だという。貴様も彼にたぶらかされて、なにか不埒を働いているのに相違あるまい。真つ直ぐに云え」

夫にいくら責められても、お道は決して不埒を働いた覚えはないと泣いて抗弁した。しかし自分にも心得違いはある。それは重々恐れ入りますと云って、一切の秘密を夫とおじさん

との前で白状した。

「このお正月に浄円寺に御参詣にまいりますと、和尚さまは別間でいろいろお話のあつた末に、わたくしの顔をつくづく御覧になりまして、しきりに溜息ためいきをついておいでになりましたが、やがて低い声で『ああ、御運の悪い方だ』と独り言のように仰しゃいました。その日はそれでお別れ申しましたが、二月に又お参りをいたしますと、和尚さまはわたくしの顔を見て、又同じようなことを云つて溜息をついておいでになりますので、わたくしも何かと不安心になつてまいります、『それはどうした訳でございましょう』と、こわごわ伺いますと、和尚さまは気の毒そうに、『どうもあなたは御相ごそうがよろしくない。御亭主を持つていられると、今にお命にもかかわるような禍わざわいいが来る。出来ることならば独り身におなり遊ばすとよいが、さもないとあなたばかりではない、お嬢さまにも、おそろしい災難が落ちて来るかも知れない』と諭さとすように仰しゃいました。こう聞いて私もぞつとしました。自分はともあれ、せめて娘だけでも災難をのがれる工夫くふうはございますまいかと押し返して伺いますと、和尚さまは『お気の毒であるが、母子おやこは一体、あなたが禍わざわいいを避ける工夫をしない限りは、お嬢さまも所詮しよせんのがれることはできない』と……。そう云われた時の……わたくしの心は……お察し下さいまし」と、お道は声を立てて泣いた。

「今のお前たちが聞いたら、一と口に迷信とか馬鹿々々しいとか蔑けなしてしまふだろうが、その頃の人間、殊に女などはみんなそうしたものであつたよ」と、おじさんはここで註を入れて、

わたしに説明してくれた。

それを聴いてからお道には暗い影がまつわつて離れなかつた。どんな禍いが降りかかつて来ようとも、自分だけは前世の約束とも諦めよう。しかし可愛い娘にまでまぎぞえの禍いを着せるということは、母の身として考えることさえも恐ろしかつた。あまりに痛々しかつた。お道にとつては、夫も大切には相違なかつたが、娘はさらに可愛かつた。自分の命よりいとおしかつた。第一に娘を救い、あわせて自分の身を全うするには、飽きも飽かれもしない夫の家を去るよりほかにないと思つた。

それでも彼女は幾たびか躊躇した。そのうち二月も過ぎて、娘のお春の節句が来た。小幡の家でも雛を飾つた。緋桃白桃の影をおぼろげにゆるがせる雛段の夜の灯を、お道は悲しく見つめた。来年も再来年も無事に雛祭りが出来るであろうか。娘はいつまでも無事であろうか。呪われた母と娘とはどちらが先に禍いを受けるのであろうか。そんな恐れと悲しみとが彼女の胸一ぱいに拡がつて、あわれなる母は今年の白酒に酔えなかつた。

小幡の家では五日の日に雛をかたづけた。今更ではないが雛の別れは寂しかつた。その日の午すぎにお道が貸本屋から借りた草双紙を読んでみると、お春は母の膝に取りつきながらその挿絵を無心にのぞいていた。草双紙は、かの薄墨草紙で、むごい主人の手討に逢つて、杜若かきつばたの咲く古池に沈められたお文という腰元の魂が、奥方のまえに形をあらわしてその恨みを訴えるというところで、その幽霊が物凄く描いてあつた。稚いお春もこれには余ほどおび

やかされたらしく、その絵を指して「これ、なに」と、こわごわ訊いた。

「それは文という女のお化けです。お前もおとなしくしないと、庭のお池からこういう怖いお化けが出ますよ」

嚇おどすつもりでもなかつたが、お道は何心なくこう云つて聞かせると、それがお春の神経を強く刺激したらしく、ひきつけたように真つ蒼になつて母の膝にひしとしがみ付いてしまつた。

その晩にお春はおそわれたように叫んだ。

「ふみが来た!」

明くる晩もまた叫んだ。

「ふみが来た!」

飛んだことをしたと後悔して、お道は早々にかの草双紙を返してしまつた。お春は三晩つづいてお文の名を呼んだ。後悔と心配とで、お道も碌々に眠られなかつた。そうして、これが彼の恐ろしい禍いの来る前触れではないかとも恐れられた。彼女の眼の前にも、お文の姿がまぼろしのように現われた。

お道もとうとう決心した。自分の信じている任職の教えにしたがつて、ここの屋敷を立ち退くよりほかはないと決心した。無心の幼児おひなこがお文の名を呼びつづけるのを利用して、かれは俄にわかかに怪談の作者となつた。その偽りの怪談を口実にして、夫の家を去ろうとしたので

あつた。「馬鹿な奴め」と、小幡は自分の前に泣き伏している妻を呆れるように叱つた。しかし、こんな浅はかな女の企みの底にも、人の母として我が子を思う愛の泉のひそんで流れていることを、Kのおじさんも認めないわけには行かなかつた。おじさんの取りなしで、お道はようように夫のゆるしを受けた。

「こんなことは義兄の松村にも聞かしたくない。しかし義兄の手前、屋敷中の者どもの手前、なんとかおさまりを付けなければなるまいが、どうしたものでござろう」

小幡から相談をうけてKのおじさんも考えた。結局、おじさんの菩提寺の僧を頼んで、表向きは得体の知れないお文の魂のための追善供養を営むということにした。お春は医師の療治をうけて夜啼きをやめた。追善供養の功力によつて、お文の幽霊もその後は形を現わさなくなつたと、まことしやかに伝えられた。

その秘密を知らない松村彦太郎は、世の中には理屈で説明のできない不思議なこともあるものだと言をかしげて、日頃自分と親しい二、三の人達にひそかに話した。わたしの叔父もそれを聴いた一人であつた。

お文の幽霊を草双紙のなかから見つけ出した半七の鋭い眼力を、Kのおじさんは今更のように感服した。浄円寺の住職はなんの目的でお道に恐ろしい運命を予言したか、それに就いては半七も余り詳しい註釈を加えるのを憚っているらしかつたが、それから半年の後にその住職は女犯の罪で寺社方の手に捕らわれたのを聴いて、お道は又ぞつとした。彼女は危い断

崖の上に立っていたのを、幸いに半七のために救われたのであった。

「今も云う通り、この秘密は小幡夫婦と私のほかには誰も知らないことだ。小幡夫婦はまだ生きている。小幡は維新後に官吏になって今は相当の地位にのぼっている。わたしが今夜話したことは誰にも吹聴ふいちょうしない方がいいぞ」と、Kのおじさんは話の終りにこう付け加えた。

この話の済む頃には夜の雨もだんだん小降りになって、庭の八つ手の葉のざわめきも眠ったように鎮まった。

幼いわたしのあたまには、この話が非常に興味あるものとして刻み込まれた。併しあとで考えると、これらの探偵談は半七としては朝飯前の仕事に過ぎないので、その以上の人を衝動するような彼の冒険仕事はまだまだほかにたくさんあった。彼は江戸時代に於おける隠れたシヤアロック・ホームズであった。

わたしが半七によく逢うようになったのは、それから十年の後で、あたかも日清戦争が終りを告げた頃であった。Kのおじさんは、もう此の世にいなかった。半七は七十を三つ越したとか云っていたが、まだ元氣の好い、不思議なくらいに水々しいお爺さんであった。養子とうぶつやに唐物商を開かせて、自分は楽隠居でぶらぶら遊んでいた。わたしは或る機会から、この半七老人と懇意になって、赤坂の隠居所へたびたび遊びに行くようになった。老人はなかなか贅ぜいたく沢で、上等の茶を淹いれて旨い菓子を食わせてくれた。

その茶話ちやばなしのあいだに、わたしは彼の昔語りをいろいろ聴いた。一冊の手帳は殆ど彼の探偵



物語でうずめられてしまった。その中から私が最も興味を感じたものをだんだんに拾い出して行こうと思う。時代の前後を問わずに――



半七捕物帳 01 お文<sup>ふみ</sup>の魂  
岡本綺堂 著

[[青空文庫図書カード](#)]

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（一）」光文社文庫、光文社  
1985（昭和60）年11月20日初版1刷発行  
1997（平成9）年3月25日20刷発行

入力：A.Morimine

校正：原田頌子

2001年4月13日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

PDF 変換

Editor : Tomoyuki Kawano

Tools : MacOS X 10.6.3(合成) + egword universal 2.0.2

Fonts : Web-O-Mints + DT Flowers + ヒラギノ